

2026 年 8 月 29 日

保育心理士フォローアップ講座 資料

保護者理解と子ども理解の手がかり

藤林清仁（同朋大学）

1、発達を理解するために；障害児である前に「子ども」として理解する

① 子どもとしての当たり前の発達を踏まえよう；あらためて発達とは？

○なぜ発達を理解し直すのか？

子どもが暴力や暴言などの「問題な行動」をすると「やめさせたい」と思い、どう働きかけるとやめるかに意識が向きやすくなる；叱り方の問題にされやすい

子どもが食べない、着替えができない等の状態にあると、「できるようになって欲しい」と思い、どうしたらできるようになるかに意識が向きやすくなる；教え方の問題になる
→「子どもを変えたい」という思いです。その取り組みは「大人主体」の取り組み；行動変容

○子どもの思いや願いを尊重し、子どもが自ら変わる喜びを保障するのが「子ども主体」

○発達するから「できなくなる」こともある；意味の変化のプロセスとしての発達

1 歳後半の「偏食」や 4 歳児の「落ち込み現象」等々

○子どもが何に意味を感じているかを大きく踏まえよう

身体感覚の共有を通して大人を大好きになりたい

大好きな人のしていることを真似っこしながら好きなもの・好きな事を選択したい

したいことができる自分とうまくできない自分を感じつつ仲間にあこがれ頑張りたい

体験を整理しポイントを押さえることで「もっと賢くもっとカッコよく」大きくなりたい

○発達しようとするからマイナスを出す；揺れや葛藤の過程としての発達

障害児の「問題行動」に秘められた発達への願いや可能性を読み解いていこう

そのためにケース会議や、多職種の視点も活かして

② 自分らしい自分をつくる過程が発達

○保育の目標は子どもの持ち味を活かし輝かせること

「認められる自分」と共に「できない自分も OK」という感覚を育てたい

お互いの持ち味を活かし合うことが保育者集団にも求められている

2、一人一人の思いや願いを理解するために

① 子どもとしての当たり前の願いをまずは基本に据えて

○大人に受け止められたい；自分の気持ちをわかってほしいと願っているから
自分の好きなことや関心を大切にしてほしい；大人を信頼する基礎
仲間に認められたい；自分の力を発揮して認められたい、小さい子のクラスでの当番等

② 子どもが「問題を出す」根っ子にあるしんどさを理解するために何をするか

○まずは自分たちはどうだろうか？と考えてみる

新入園児が保育室にいてくれないのは何故？；初めての場では誰でも不安

優しい人が声をかけてくれるとうれしいよね；この子にとっての優しい人って

イライラすると暴言が出たりつい物を投げたりしたくなる

イライラの原因は何だろうか、いつどういう時か観察してみるとわかるかも

苦手な食べ物、出し合ってみると案外ある

苦手なものを食べてみようと思ったのはどういう時

○「自分たちは」と考えることで「なんでこの子は！」という批判の眼差しが減る
子どもは大人の眼差しに敏感に反応する

③ 楽しい生活を保障するために、活動を吟味して

○子どもの発達状況をみんなで確認する

「問題」に秘められた可能性を考え合い、仮説を立てよう

選びたい活動は？；好きな活動を大切に保育士とワクワクを共有しよう

仲間と楽しめるとぐっと仲間に気持ちが向き世界を広げる

「できなさ」を感じている子には「できること」のステキさをたっぷりと

仲間に認められること、役立つ自分を感じられること

④ 子どものしんどさに手を当てて

○ホッとできる「居場所」の保障とそのための園全体の支援体制の確保

職員室、押入れやカーテンも

○朝の開始を快適にする；気持ちが穏やかになりやすい

好きなこと・好きな物で1対1で遊ぶ体制の確保

○楽しい活動が見通しにつながることを前提として；支援ツールを活用する

散歩先やプール遊びで使う道具などについて「実物・絵・写真」等で相談・確認する

手持無沙汰になりやすい子が「手掛かり」としやすいモノを準備する

空間把握がしにくい子のために；ロッカーの位置や座る場所の明示

否定語は避け、何をするかをわかりやすく

○児童発達支援センターの支援を受けられる場合は

発達状況に関しての情報を確かめてみよう

体の緊張をほぐす手技や、座りやすいイス等についても相談してみよう

3、「しんどいのはあなたのせいでも子どものせいでもない」と言える関係

(1)「育てにくい」は相談しにくい

- ・生活上の「育てにくさ」がよくあるレベルのことなのか心配なことなのか判断がつかない
- ・親は「気になる」とは言いにくいし、相談もしにくい

(2) どんなことがその子にとってしんどいのか

- ・発達の偏りは、対人関係やコミュニケーション面での問題になって表れる
- ・そうしたコミュニケーションの問題の基盤には、感覚レベルの問題がある
- ・特有の感覚は、本人とまわりとの間に共感が生まれにくくなることを意味する

(3)「したこと」ではなく「思い」をことばに置き換える

- ・思いにふさわしい「ことば」を伝えていく

(4)「わかってもらえた」と実感できれば、変わっていける

- ・コミュニケーションとは思いの伝わり合い

(5) 保育者は楽しい取り組みを、親は応援団をつくることを目標に

- ・子どもが世界を広げることで結果的に「問題」を卒業することを保障する実践
- ・親は、わが子に安心を保障し、わが子の世界を広げてくれる応援団を増やすことを目標

(6)「問題」は子育ての失敗ではなく、子どもの発達の証

- ・子どもの「問題」は、本人にとってもしんどさのあらわれだが、心の発達の成果でもある
- ・「問題」を子育ての失敗ではなく子どもの発達の証としてとらえる
- ・子どものチャレンジを応援することが子育ての目標

4、「将来」より「今」のしあわせを大切に

(1) 子どものしあわせ

子どもが「しあわせ」を感じるための基本的な条件は、「安全で安心できる」環境のもとで、「安定した気持ち」で生活できるということ。安全で安心できる環境とは、「不安と欠乏から免れている」ということを意味する。

どんな子どもにも安全で安心できる環境のもとで、安定した気持ちで日々の生活を送る権利がある。

(2)「育てにくい子」はしあわせを実感しにくい子

- ・育てにくいところがある子どもは、命の安全が守られた環境のもとで暮らしていても、叱られることが多く「思いを理解してもらえない」ために心が不安定になる。
- ・子どもは大好きな大人に「わかってもらえている」「愛されている」と感じて生きることを願っている。
- ・発達していくうえで必要としている援助がほかの子どもより多く、しかもていねいさが求められるのだと考える。
- ・「子どもらしさ」とは自分の好きなことであればいくらでもできるし、嫌いなことは絶対したくないということ。
- ・「先生大好き、仲間も好き、そして世界を広げている自分が好き」という思いが、しんどさを乗り越える「心のバネ」となる。

5、乳幼児期に育てたい自己充実感と自己安定感

- ・自分を役立つ人間として感じられること「自己充実感」
- ・大人はちょっとだけがんばって、子どもに食事と清潔と安心を保障
- ・マイナスも含めた自分をいとおしむ感覚「自己安定感」
- ・子どもはお手伝いが大好き。大好きな親の「ありがとう」が大好き

6、親と保育士

- ・子どもは場所によって異なる姿を出す
 - ・子どもの顔のどこを見ているかで、親と保育者の感じ方は違う
 - ・親と保育者とではくい違うと思っていた方が、互いに歩み寄りやすい
 - ・親は保育者ではない。子どものことを客観的に受け止めることは難しい。
 - ・わが子の良さを認めてほしいのが親心。
 - ・そして親はいつでも若葉マーク。
 - ・日々のイライラを軽くするためには、子どもが楽しんで力をつけられる場と、お母さん仲間が必要。
-
- ・子ども同様、保育士も「問題」は一人では卒業できない
 - ・「大好きな先達」と、自分を認め励ましてくれる仲間がいてはじめて保育の世界が広がる
 - ・生活の実践に学び、信頼できる先輩に悩みを語り、仲間と子どもについて語り合うことが保育者の発達の条件。
 - ・情けなくだらしなく泣いてしまうあなたをいとおしんでくれる仲間がいればしんどい「問題」とつきあう力を得る。